

未来の稲作への思い

北杜市立甲陵中学校二年

上野 桜

のだ。疑問に思った私は祖父に尋ねてみた。すると、昭和三十四年に起こった「伊勢湾台風」が水田の形に関係していることを教えてくれた。

その後区画整理が行われた。その際、七里岩の赤土を区画整理に使い、土地を均し住人に分割した。当時祖父の父、つまりわたしの曾祖父は地区の農業委員という、地域の農家の代表をしていた。そのため、この区画整理で行われた田畑の分割を担当したそう。曾祖父は温厚で

私の体は祖父が作った米や野菜でできていると言っても過言ではない。祖父は年間三百六十日も農業をするほどの努力家で、八反の水田で稲作をし、年間約三十五種類の野菜を育てている。私の住んでいる山梨県は盆地のため夏は暑く、冬は八ヶ岳風が吹き寒い。この環境で、毎日農業をしている祖父を尊敬する。

昭和三十四年午前八時ごろ、三日間降り続いた雨の影響で釜無川上流の堤防が決壊した。私の住んでいる一ツ谷地区にも濁流が流れ込み、死者三名、行方不明者八名、全壊家屋四戸、流失家屋六戸を出した。祖父の話によると堤防で取り残される人、家と共に押し流される人、さらには水害のさなか養蚕が原因の火災も発生し、まさに悲壮な状態だったそう。当時小学三年生だった祖父は、約六十年前のことをまるで昨日あったことのように鮮明に語ってくれた。あまりにも衝撃的な話を聞き、私は言葉を失った。水害で田畑が流出してしまったため、

思いやりのある人だったそう。地域の人たちに長方形の形の整った田畑を分割し、自分は余った形の歪な台形の田畑をもらったそう。私は祖父からこの話を聞き、自宅周辺に広がる水田には意外な歴史があり、今の平和な日常からは想像もつかないと様々な想いが脳裏を駆け巡った。それと同時に、我が家の水田が歪な形をしている理由が分かった。約六十年前の水害が何事もなかったかのように、自宅周辺の水田では稲作が行わ

今年春、私は祖父の田植えを手伝った。そのとき、我が家の水田だけ歪な形が多いことに気がついた。他の家の水田は田植え機やコンバインが入りやすい水田にも関わらず、我が家だけ形が歪な

た。疑問に思った私は祖父に尋ねてみた。すると、昭和三十四年に起こった「伊勢湾台風」が水田の形に関係していることを教えてくれた。

その後区画整理が行われた。その際、七里岩の赤土を区画整理に使い、土地を均し住人に分割した。当時祖父の父、つまりわたしの曾祖父は地区の農業委員という、地域の農家の代表をしていた。そのため、この区画整理で行われた田畑の分割を担当したそう。曾祖父は温厚で

れており、農家の方々の苦労や努力を感じた。

祖父は、米のランキングで特A評価を受賞している梨北米という米を育てている。苦労して育てた米を家族がおいしいと言ったときに稲作をしていてやりがいを感じるそうだった。私も祖父の作る米は、市販の米や飲食店の米よりも断然おいしいと思う。しかし、祖父が残念に思うことは、米の販売価格が安く肥料や農薬が高いため、努力した分の利益がないことだと言う。確かに、米が上がるまでの支出より収入が少ないと、赤字になってしまいうのでもう少し高価な値段で販売できると良いと思う。また祖父の話によると、私の住む一ツ谷地区でも水田を売ってしまったたり、子供が跡を継いでくれないために農業をやめてしまっ

たり、農業人口は年々減少してきているという。先程の話のように、米の販売は利益が出にくいため、農業者が意欲を失い米を作らなくなってきた。今の若者は苦労したくないからやりたくない」と稲作をしたがらない。いわゆる「後継者不足」だ。祖父は将来の農業を危惧していることを真剣な顔付きで語ってくれた。

農業は、日本の第一次産業の中心を成し、その中でも稲作は弥生時代から受け継がれる歴史とした「食文化」だと私は思う。後継者不足が問題となっている今、未来に稲作を伝えていくためには、若者に稲作の魅力を知ってもらい関心を持つてもらわなければならない。私は考える。